



人妻

リアルドリーム文庫

人妻の 略奪される女たち 秘め事

挿絵/こくだかや
井出遊鬼

試し読み版

第一章	倉橋一成の結婚と憂鬱	4
第二章	人妻たちの事情	15
第三章	美女との密会	39
第四章	罨に堕ちた若妻	62
第五章	図書館の情事	92
第六章	美女を寝取らば	119
第七章	別れの情事	143
第八章	妹鬻り	160
第九章	美女の秘め事	185
第十章	晒される女たち	210
第十一章	美しき女の秘密	229



登場人物

Characters

戸田 彩

(とだ あや)

美しい人妻。読書好き。本人は望んでいないが、男の欲望をかきたててしまう、魔性を持っている。通っている図書館で一成と出会い、次第に心を開いていく。

倉橋 一成

(くらはし いっせい)

一級建築士の資格を持つ建築士。真面目で温厚。妻である葵とのすれ違いを感じる日常の中で、彩と出会い、惹かれていく。

倉橋 葵

(くらはし あおい)

一成の妻。清楚に見えるが計算高く遊び好き。将来性を見込んで一成と結婚したものの、既に関係は冷えきっている。

倉橋 梨花

(くらはし りか)

一成の妹。活発でボーイッシュな女性。子ども好きで保育士をしている。義姉である葵とは仲が良い。

第一章 倉橋一成の結婚と憂鬱

倉橋一成の人生は順風満帆だった。傍はたから見てもそうだが、自分自身でもそう思っている。

仲が良く穏やかな両親のもと、明るく活発な妹と一緒に育ち、大きな反抗期もなかった。スポーツで目立つことはなかったが、学業は優秀でAランク大学の理工学部に現役合格している。卒業後は有名設計事務所に入り、五年という最短期間で一級建築士の資格を取得。近い将来、独立を視野に入れて貯蓄中。

私生活では、美人の妻と結婚して三年目。そろそろ子どもを作ろうかという雰囲気になっている。

(……と、振り返ってみれば大した挫折もなく、ここまでやってきたわけだ)
深夜近く、一人つぶやきながら一成はベッドに入った。

秋も深まり、室温は低い。一成の体は、帰宅の間に冷え切っていた。

「……ん」

隣で妻が寝返りを打つ。ベッドの中は、妻の体温で十分に暖まっている。一成より三歳年下の葵は、一度眠りにつくくと朝まで目覚めることはない。大きな地震が来てもとび起きるのは一成一人。朝の食卓でからかっても、葵はキョトンとするのが常だ。

「ふう…最近、なんか疲れるなあ」

独り言を声に出すと、一成は冷えた体を温めるため、葵に密着した。部屋着のトレーナーの裾を捲り、無防備な乳房に手を伸ばす。大きすぎず小さすぎもしない乳房は、一成の手にピタリと馴染んで吸いついてくる。

「んんっ」

一成の手の冷たさに、葵が小さく呻くが、それでも起きる気配はない。妻が目覚めないことを知っている一成は、遠慮なく柔らかかな乳房で暖を取った。

（気づいたら、オレももう三十歳か。十年後はどうなってるだろうな…独立して、子どもがいて…それから？）

何も浮かばない。きつとその先にもまた、新しいレールが敷かれているんだろう。簡単なロールプレイングゲームをクリアしていくような虚しさが、一成の心に広がっていく。

（オレが贅沢なのかなあ…人生ってこんなものか？）

葵の寝息が乱れてきた。気づかないうちに、一成の手に力がこもりすぎたようだ。冷たい手の中で、乳首が硬くなっている。

(眠ってても、身体は感じるのか……どんな夢を見るのかな)

ふと興味がわいた一成は、葵の乳首をつまんでみた。

「はぁっ……ン」

葵が悩まし気な声を上げる。その途端、一成はふっと手を離し、身体の向きを変えた。葵から離れると、暗がりに慣れてきた目で天井を見上げる。

(……倦怠期ってやつなのかな)

結婚して三年目。葵とのセックスを思うと、なんだか気が重くなる。前回、葵を抱いたのはいつだったか……。

一成が葵と出会ったのは、大学卒業を控えた二十一歳の頃だった。近くにある大学との合同コンパに現れたのが、新入生の葵。それがきっかけである。

自分よりランクが上の難関大学に現役合格し、就職先も決定している一成に対し、葵は最初から好印象を抱いた様子だった。

さり気なく一成の隣席に移動し、いつの間にか距離を詰めてくる。

「すごいなあ、倉橋さんって勉強得意なんですねえ」

「勉強が得意って、面白い表現するね」

読書好きで言葉に敏感な一成も、葵に興味を引かれた。なかなか可愛い顔立ちをしているが、派手ではない。ファッションやヘアスタイルが清楚にまとめられているところが、一成を安心させる。

「えー、ふつうなんて言います?」

「いや、頭がいいとかは、よく言われたけど」

「あはは、倉橋さん、頭いいってサラって自慢しますね」

「あ、いや、そういう意味じゃ……」

何がそんなにおかしいのか、葵は一成の言動にいちいち反応した。笑いながら密着する身体に、一成の顔が赤くなる。

そして連絡先を交換した二人は、三度目のデートで恋人になった。

あえて言うことでもないので黙っていたが、一成は童貞だった。

別にモテなかったわけではないし、キスマまでは経験している。ただ一成は奥手で、性的執着心もそこまで強くはなかったのだ。あと一步の押しが足りず、なんとなく一

成は童貞のまま過ごしてきた。

周りの友人たちも、あまり下ネタにのつてこない堅物ではあるが、まさか一成が童貞だとは思っていない。

そんな一成を、葵は上手く誘導した。

「ねえ、歩くの疲れちゃった……」

繁華街でのシヨップینگにつき合わせ、ホテルが立ち並ぶ通りの入り口で、葵がうつたえかける。薄暗くなった街には、そろそろ明かりが灯り始めている。

「ちよっと早いけど……もう帰る？」

あくまで鈍感な一成に腕を絡ませ、葵は潤んだ瞳でジッと見つめた。

「一成さん……今日は遅くなるって言ってきたんです……」

「え？」

葵の肩越しに、ホテルのネオンが点灯している。不意に一成の頭に血が上り、キュッと胃がせり上がってきた。

「葵ちゃん……」

その先の言葉を呑みこんだまま、二人はホテルの扉をくぐった。

部屋に入ってもオロオロしている一成の前で、ことさら葵がはしゃいでいる。

「きゃー、ベッドおつきい！ 葵が寝てるのと、ぜんぜん違いますう！」

スプリングで弾むたびに、葵のミニスカートがフワツととめくれる。肉感的な太ももが、一成の視覚を刺激する。絶妙に下着を見せない葵の得意技に、すっかり一成は魅了された。

「えっとお……せつかくだから、シャワー浴びてきますね」

（なにか、せつかくなんだろう？）

啞然としながらドキドキしている一成の耳に、シャワーの音が聞こえてくる。すっかり葵のペースである。

「なんか……緊張しちゃいますね」

「そっ……そうだね」

「恥ずかしいから、ベッドにもぐつちやいませよ」

バスタオル一枚を身にまとい、二人はベッドの中で抱き合った。いちやついて緊張をほぐしているうちに、互いの手がきわどいところへ伸びていく。

「一成さん……なんか硬くなってますよ」

「葵ちゃんはやわらかい」

葵の手がペニスに触れるのと同時に、一成は乳房を揉んだ……。

一成がはつきりと覚えているのはここまでだ。頭のヒューズが切れた一成は、さくらんぼのような乳首に夢中で吸いついた。

「葵ちゃん！ ……ンンっ」

「あ……一成さん……」

ジュジュジュジュズズツ……乳首をしゃぶりながら葵に頭を撫でられて、一成は赤子に返っていく。おっぱいに満足した一成が次に向かうのは、子宮のある股間だ。勝手が分からない一成のペニスは、葵の指に優しく導かれ、熱く濡れた陰唇へたどり着いた。

「ああ……わたし……はずかしいよお……こんなに濡れて……」

「葵ちゃん、いいの？」

童貞を捨てる間際になって、我に返った一成が葵を見つめる。

葵にとっては今が勝負所。葵に群がる男たちの中で、一番将来性のありそうな一成をがっちりつかむのだ。みるみるうちに葵の目が潤む。

「……葵をだいじにしてね……」

「もちろんだよ、葵ちゃん」

葵の指が自ら陰唇を開き、ペニスの進入を促した。

「……いいよ……一成さん……葵のここに入れて……」

ヌツ……ヌツヌツ……うねうねした肉壁に迎えられ、一成は男になった。

（おおお……すげえ！　これが女の中なんだ！）

羊水の中を漂っているような心地よさの中、一成はがむしゃらに腰を振った。正直な感想が、一成の口からもれる。

「き、きもちいい」

「あつあつ……あん……一成さん……きてえ」

射精の気配を感じた葵が、下から一成にすがりつく。それまで腰を使わないように気を付けていたが、感極まっている一成は気づきそうにない。

（ちよつとだけ、締めちゃおつかいな）

葵は少しだけ腰を浮かし、限界寸前のペニスをキュツと圧迫する。

「葵ちゃん、いく！」

「いいよ……葵の中にいっぱい出して」

めくるめく官能の渦に吞まれ、一成は精液を吐き出し続けた。

それから卒業するまでの短い間、一成は葵の身体に溺れた。初めて嗅ぐ性器の匂い、初めてすすする愛液の味、そして初めて唇と舌と唾液にまみれる感触。葵が見せる新しい世界に、一成は夢中だった。

やがて葵も大学を卒業し、二人は仕事をしながら交際を続けた。

「……ずっと葵ちゃんと一緒にいたい」

「一成さん、それってプロポーズですか？」

「う、うん」

「もう一回、言ってください。今度は呼び捨てで」

「……葵……オレと結婚してください」

「はい。よろしくお願ひしますね」

こうして仕事も軌道に乗り、一級建築士の資格を取得した年、一成と葵は結婚した。真面目で将来性のある一成と、清楚で美人な葵のカップルは、皆から祝福されて結婚生活をスタートさせた。

それから三年たつが、二人の間にはなんの問題もない。

(ただ……ただ慣れたただけだ)

一成は一人眠れず、考えていた。風呂上がりに見せる葵の裸や、トイレから聞こえる葵の排尿音に興奮し、毎夜のように葵の肉体を求めた新婚時代。

……それほどのめり込んだセックスが、今では妊娠のための計画的作業に変わりつつある。重要案件を任せられるようになり、仕事中心の生活で体が疲れているせいもあるが……。

(それだけなのかなあ。結婚ってこんなものなのか……)

答えが出ないまま、一成はまどろんでいった。

「ごはん、食べてかないの？」

「昨夜は遅くてさ、ギリギリまで寝たかつたんだ」

慌ただしく玄関に向かう一成に、諦めたような葵の言葉が降り注ぐ。

「昨夜もでしょ。最近忙しいね」

「ああ、今任されている図面が、賞を取れるかもしれないんだ」

「ふうん、すごいんだ」

一成の仕事に誇らしさは感じているが、その内容にまでは興味がない。自然と葵の言葉は気のないものになる。一成もそれは承知していた。

「わるいけど、たぶん今夜も……」

「はいはい。今夜も遅くなるのね」

「ああ、ごめん」

一成も気のない謝罪を口にする、そのまま葵に背を向けた。……新婚の頃は、行つてきますのキスを欠かさなかつたが。

一成が後ろ手に扉を閉めると、葵は寝乱れた髪をかき上げながら溜息をついた。

第二章 人妻たちの事情

(一)

ずっとかかりきりだった仕事にめどが付き、一成は図書館に来ていた。たいていの資料調査はインターネットで事足りるのだが、この図書館は一成にとって特別だ。一世代前の有名建築士による設計で、贅沢で入り組んだ空間デザインになっているのだ。

(公共施設にこれだけの予算がかけられるなんて、今じゃ考えられないよな)

一成は羨望せんぼうの眼差しで、吹き抜けの中庭から青空を見上げた。

名建築の実物に触れながら、資料に目を通す。ちよつと余裕ができた時の、息抜き仕事だ。おまけに読書好きの一成にとって、図書館は気分転換にもなる。

(こんどの週末は、ゆつくり新刊の単行本を手に取りたいとこだけど……忙しかった埋め合わせに、葵に服でも買ってあげないとな)

とりとめのない事を考えながら、中庭のベンチで持参したタンブラーのコーヒーをひと口すすする。それからキュッと蓋を閉めると、一成は中に入りキョロキョロと周り

を見渡し始めた。

(この香り……)

特徴のある香りが微かに漂っている。一成は鼻をヒクヒクさせて、その香りを吸い込んだ。

……動物性で野性味のある、オリエンタル系と分類される香水の匂い……。

書棚から書棚へ、入り組んだ回廊のような図書館の中で、一成は狩猟犬のように香りをたどった。小説のコーナーを五十音順にさまよい、随筆のコーナーへ。匂いがどんだん強くなる。翻訳のイギリス・アメリカ文学から裏側に回り、フランス文学の前にその女は佇んでいた。

(やっぱりいた)

本を選別するふりを装い、一成はその女性を盗み見る。この図書館で何度も見ていたのだが、改めて一成は息を呑んだ。

(なんて……きれいな女性だろう)

小窓から射しこむ光が、宗教画の天使のように女性を浮かび上がらせている。女性の手を取った本を熱心に読んでいるようで、微かに眉間を寄せている。視界の片隅に現れた一成に気づいた様子もない。女性の注意を引かないように、息を殺して一成は

鑑賞を続けた。

造形美を体現したかのような顔のライン。白い陶磁器のような肌。ぱっちりとした目は微かに切れ上がっていて、吸い込まれそうな輝きを放っている。薄い桃色の唇は、集中のあまりキリッと結ばれている。

通り過ぎる人を振り返らせるほど、美しい女性だった。それも、寄せ付けない冷たさをまとう種類の美しさではなく、どこか可愛らしい愛嬌を感じさせる。

男なら、だれもが恋せずにはいられない女だ。

(でも……なんでだろう)

一成が気になってしまふのは、陽の気質を感じさせる顔立ちなのに、女性の表情にはいつも陰りがあることだ。

(何もかも、ちぐはぐだ)

女性の服装は、真っ白な長袖のブラウスに、薄いブルーのスキニージーンズ。一成が見かける時は、いつもそうだった。気品のある顔立ちと相まって、実に清楚だ。

その印象と、野性味の強い香水が合わないのだ。

それに……。

露出度が低く、単色で、飾りのないファッションは、色気を消そうという意思を感

じさせる。それなのに全体の印象は、女性の意志を見事に裏切っていた。ピタリと貼りついたスキニージーンズは、細い足首と引き締まったヒップを強調し、特徴のないブラウスは、くびれたウエストと不似合いに盛り上がった乳房を隠しきれずにいる。陽の顔立ちと陰の表情。清楚な佇まいに野性的な香り。中性的ないでたちに妖艶な身体つき。色々なギャップが、その女性の神秘的な魅力となっていた。

「あ、倉橋さん」

一成に気づいた女性が、突然振り向く。盗み見ていた後ろめたさで慌てた一成は、持っていたタンブラーを落としてしまった。

カランカラン……。

静かな図書館に金属音が響く。一成は、急いで床に転がるタンブラーを拾い、立ち上がった。

「す、すいません」

「こちらこそ、なんだか驚かせてしまつて」

「いや、戸田^とさんは何も……」

どぎまぎと一成は取り繕った。

女性の名は、戸田彩^{あや}。三年ほど前から図書館で互いを見かけていたが、つい最近、言葉を交わすようになっていた。

初めて会話をした日。

……その日も彩を目で追っていた一成は、何やら彼女がっかりしている様子なのに気づいた。手には、何年か前にベストセラーになった本の上巻が握られている。内気な一成らしくもなく、気づいた時には声をかけていた。

「下巻、探してるんですか？」

警戒心で固まる彩を見て、すぐに後悔したかも遅い。

「あ、すいません。失礼しました。ちょうど読んだばかりだったものですから」

「……よく、お見かけしますよね」

礼儀正しく温和な一成の態度に、少し緊張が解けたようだ。三年も前から図書館で見かけてはいたので、本好き同士で何か通じるものもあつたのだろう。

「これ、読みだしたら止まらないですよね」

「そうなんです。読んでみて面白かったら、と思つて上巻だけ借りたら、下巻が貸し出し中で……」

（思つた通り、きれいな声だ。……こんな風に話すんだ……でも、まさか向こうもオレ

のことを覚えてるなんて！)

一成は震える手で、バッグの中から本を取り出し出した。書店で買って一気読みした、下巻の文庫本である。

「ほんとに、昨日読み終わったばかりなんです。これ、差し上げますよ」

「え？ ……そんな」

「読み終わったから古本に出そうと思ってたんですけど、どうせタダ同然なんで。読みたい人に貰ってもらう方が嬉しいですから」

押しつけるように本を渡すと、一成はぎこちなく立ち去った。その背中を、不思議そうな顔で彩は見つめていた。

(けっこう前に流行はやった本なのに、読むのが同じタイミング……こんな偶然あるなんて)

そんな偶然あるわけがない。

彩が図書館で上巻を借りるのを見て、一成は書店で購入したのだ。同じ本を読んで、彩と同じ時間を共有したかったのかもしれない。

(まさかオレ……この女性ひとのことが……)

「ええっ!? ……まっ、まさか…そんなこと……」

「彩……彩の全部、オレだけのものにした」

ショーツをずらし、ツルリとした恥丘を撫でる。彩の顔に動揺が走るが、一成の強引さに抵抗しきれなくなっている。

押しに弱いのかもしれない……ふと、一成の頭にそんな考えがよぎった。

「だめです! ……そんなことされたら…私……」

「私? その先は?」

柄にもなく一成が意地悪に責めたてると、彩の目が潤んでくる。

「ハア…ハア…ハア…ハア……一成…さん……」

一成の指は、もう陰唇を弄っている。彩は諦めたように目を閉じた。

クチュ……クチュ……彩の股間がぬめり始める。すると香水の匂いに、興奮した体臭が混じってくる。クチュツ……クチュクチュ……磯に跳ねる魚……ピチャツ……ピチャ……人魚姫の匂い。

彩が薄目を開ける。……スイッチが切り替わったような妖艶な瞳。驚く一成に、彩が囁く。

「ダメって…言ったのに……」

「くっ…彩」

彩の歯が、ギリギリと一成の手に喰いこむ。同時に肉壁がきゅうううつと収縮し、指を引き込んでくる。いつ人が来るか分からない、危うい状況の中、ついに彩は絶頂に達したのだった。

服の乱れを整え、その場を離れた二人だが、一度ついてしまった火は、まだくすぶっていた。

隠しきれないくらい勃起している一成のペニスを、隣を歩く彩がソツと撫でる。

「彩…オレ、どうにかなつちやいそうだ」

「一成さん…こつちに…」

人目を盗んで男子トイレの個室にこもった二人は、待ちかねたように唇を合わせた。クチュクツクチュ…いままでは受け入れるだけだった彩も、積極的に一成の舌を貪っている。

「ンンンううっ…ンンンっ…ンンンンッ…うううっ」

一成が舌を引くと、じれったそうに彩が追いかけてくる。初めて彩の舌が、一成の

口に入ってきた。

クチュクチュクチュクチュクチュクチュク……名残惜しそうに唇を離すと、彩の口もとが唾液で濡れている。一成がそれを舐めると、また彩が唇を合わせてくる……。

いつまでもこうしていたいのが、閉館時間が迫っていた。

カチャカチャとせわしなくベルトを外し、一成がパンツを下ろす。彩が便座に座ると、急角度で勃起したペニスが目の前にある。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

二人の間に言葉はなく、熱い視線だけが互いの思いを伝えていた。

（お願いだ、彩の口で！）

（してあげる……）

一成のペニスに、彩が両手を添える。あいかわらずヒンヤリと冷たい指だ。熱いペニスに冷湿布を当てたように心地いい。彩は目をつむると、先端からゆっくりペニスを呑みこんでいった。

ズズズズズズズズズズ……しっかりと根元を持って、咽喉の奥まで丸呑みにする。

「くううっ」

あまりの悦楽に、一成がつい声を上げてしまう。

ジュプツズズズズズズズズズズ……今度は奥からゆっくりペニスを引き抜いてくる。チユパツ……吐き出されたペニスが、生まれたての子馬のように唾液で濡れている。それを彩は慈しむように舐めた。

「ンンンう……ン……ううん……ンっ……ンっ……」

ペロペロと這う舌の感触に、一成の背筋がゾクゾクとする。このまま昇天してしまいたいそうだ……。

「彩！」

するとその時、それは急にやってきた。奥の方から激しい尿意がせり上がってきたのだ。一成はブルブルツと身震いした。

「ご、ごめん……彩！」

小声で囁く一成の様子に異変を感じ、彩が便座から立ち上がる。せまい個室で体を密着させ、一成の耳もとに彩は顔を寄せた。

「え？ ……一成さん……？ どうしたの？」

「ちよっと、我慢できないんだ」

緊迫した表情で足をモジモジさせる一成を見て、彩は察した。一瞬目を合わせた後、彩が意外な言葉を口にする。

「……私：気にしないから……ここですて」

もはや事態は急を要している。一成は慌てて便座に座ろうとした……が、途中で思い返し、困った顔で彩を見つめる。勃起が強すぎて、座った状態で放尿できないことに気づいたのだ。

「だめだ、立ってじゃないと」

なんとという失態だ！ あまりの情けなさで泣きそうになっていると、彩が耳もとで囁いた。

「一成さん……いいの……私が押さえてあげてあげて……」

彩は両手で強くペニスを握り、便器に向けて角度を合わせた。

「あつ……彩、ごめんっ！」

恥も外聞もなかった。一成のペニスから、激しい勢いで小水が噴き出した。ジャポポポポポポポポポ……男の尊厳を消し去ってしまう音。

一成が残らず出し切ってしまうまで、彩はペニスを握り締めていた。そして酪農家が牛乳を搾るような指使いで、放尿を促している。

「くっ、くうっ、彩あ」

巧みな彩の指使いで硬くなるペニスだが、恥辱的な状況を自覚するにつれ、やがて衰れに萎しぼんでいった。……そして最後の滴が落ちた時、あれほど自己主張していたペニスは、すつかりしよげかえっていた。

「くすっ」

回復不能なダメージを受けている一成を慰めるように、彩が微笑む。

「私……将来、一成さんの介護ができそうですね」

この女ひとは、本当に天使だ……一成が泣きべそをかいているうちに、彩はサツと便器の水を流して、再び便座に座った。

ズズズツゴゴゴゴゴ……流水音にかき消されて聞こえにくかったが、確かに彩はこう言った。

「……キレイにしてあげますね」

目の前にぶら下がるペニスを、彩はためらうことなく口に含んだ。

「あっ、あ、彩！」

うろたえる一成の手を、励ますように彩が握る。そして彩は、ペニスをほおばった口をモグモグと動かした。

「ううっ」

チロツという舌の感触を亀頭に感じ、思わず一成が腰を引く。そんな一成の手を、彩はさらに強く握って安心させようとする。

「彩…き、きたないから」

狼狽ろうばいしている一成を見上げ、彩はチロチロと尿道を舐めた。

（お、オレの小便を…彩が舐めてくれている！）

慈愛に満ちた彩の目を見てみると、何もかも許される気がする。一成は肩の力を抜いて、彩の奉仕に身を委ねた。

「ン…ン…：…ンっ…：…ンっ…：…ンンン…：…」

クチュクチュクチュクチュ…尿道に舌先を入れるほど入念に、彩はペニスを舐めつくした。仕上げにペロリと舌を巻きあげると、しよげていたペニスがすっかり硬さを取り戻している。

「ふふ…元氣出たみたいですね」

いたずらっぽい表情で彩が見上げる。一成は無性に堪らなくなり、このまま彩を自分のものにした^{ひと}い衝動に駆られた。

（この女の中に挿^{ひと}れたい。この女の中で出したい）

そんな思いも顔に出ていたのだろうか。回復したペニスを撫でて、彩が言う。

「口で……がまんしてくださいね」

クプツ……ペニスを含んだ彩はペースを上げた。ズチュズチュジュルジュル……キツツキのように顔を動かし、ペニスに舌を巻きつける。一成はそんな彩の顔を目に焼き付けた。

（ここで、この光景を妄想しながらオナったことがある）

そう遠い昔ではない。つい最近まで、叶わぬ夢だと思っていた光景。挿入なんて贅沢を言っている場合ではない。

（あの戸田彩が、オレのチンポをしゃぶってるんだ！）

「ンっ……ンっ……んぐうっ……んううう……ンっ……んうん……」

「彩、イクよっ」

彩の頭をつかみ、一成は自分の股間に強く押しつけた。

「ふぐうっ！」

ドクン。彩の口の中で、一成のペニスが膨らんだ。ドクツ……ドクツ……ドクン……瘻攣するペニスから、濃厚な精液が大量に放出される。

「あっ、彩……彩ア……彩！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト
「ノックタリッシュノベルズ」
から書籍化!

ビギニングノベルズ
キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めない電子小説

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界
ドキドキ
妹は
イカゲシイ

ドキドキキアラフな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫